

「B型肝炎」について

B型肝炎ウイルス予防接種の定期予防接種化に関連して

「B型肝炎」は、B型肝炎ウイルス（HBV）に感染している人の“血液や体液”を介して感染することにより起こる病気のことを言います。

全世界で、約3億5,000万人がHBVに感染していると言われ、そのうち日本では、約130～150万人（およそ100人に1人）が感染していると推定され、その多くは60歳以上の高齢者とされています。

感染経路としては、以下の2つが挙げられます。

【垂直感染：母子感染】

出産時、産道においてHBVに感染した母親の血液が赤ちゃんの体内に入ることにより感染するケース。

日本においては1986年以降、母子感染予防対策が行われるようになったことで、出産時でのHBV感染はほとんど防げるようになってきているようです。

【水平感染】

医療従事者の針刺し事故や予防接種での注射器の使いまわし、性的接触、HBVに汚染された血液の輸血に伴い感染してしまうケースなど。

大人へのHBVの感染は、HBVに感染したパートナーとの性交渉の際に起こることが一般的です。しかも、自分自身の感染を知らず、気づかないうちに感染を拡大しているケースも見られます。

輸血による感染は日本国内で輸血される血液はすべてHBVの検査が行われており、輸血による感染は年間10例程度しか起こりません。

過去には、保育園の園児、先生内で集団感染が起きたこともあり、最近では父親など、家族内からの感染も、たびたび報告されています。

現在、年間約10,000人の新規感染者がいると言われています。

成人がHBVに感染しても、多くは一過性感染で自然に治癒します。一部は急性肝炎を発症しますが治癒に至ります。また従来は健康な人に発症した急性肝炎は慢性化しないといわれてきましたが、近年ジェノタイプA型と呼ばれる、欧米型やアジア・アフリカ型といった外来種のHBVに感染すると比較的高率に慢性化を起こすことも知られています。

しかし、免疫能が未熟な乳幼児が感染した場合にはHBVを異物として認識できないために排除することができず、体内に保有した状態になります。このように持続感染が起きている人は「B型肝炎ウイルスキャリア」と呼ばれます。キャリアの約90%は無症候期、肝炎期、肝炎沈静期へ移行し、その後無症候性キャリアのまま生涯を過ごします。しかし、約10%は慢性肝炎を発症し、肝硬変、肝癌へ進展する場合があります。

B型肝炎は、垂直感染と水平感染の二種類に分類されます。

垂直感染(母子感染)



母親がB型肝炎のウイルスを保有していた場合赤ちゃんへとウイルスをついてしまう事を言います。※今現在は対策がとられている為、このような感染ルートはありません。

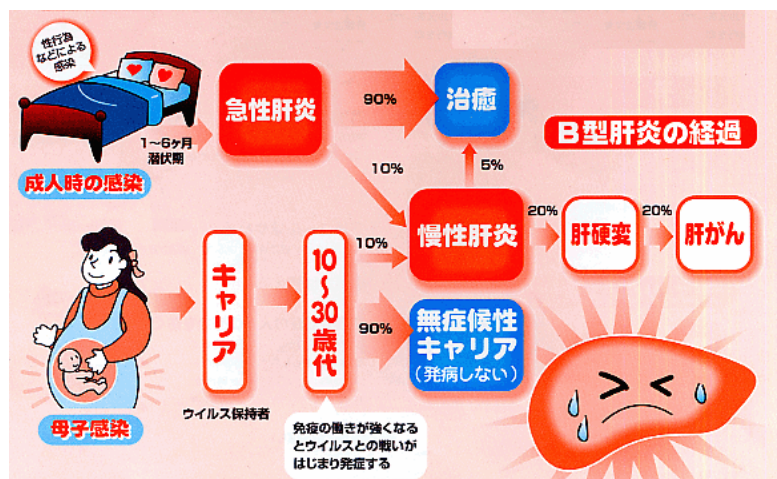
水平感染

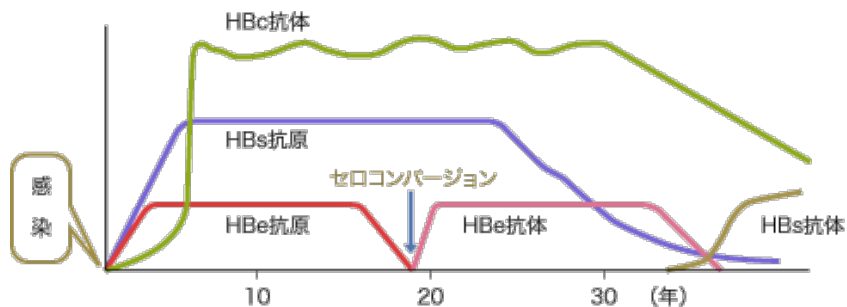
- 噛み砕いた食べ物を赤ちゃんへあげる
- 感染者の汗や涙、体液が口に入る
- 性行為
- 薬物常用者の注射器を共用する。
- ピアスや刺青を入れる際の器具の消毒不足

今現在はありませんが、以前は下記のような理由でも水平感染していました。

- 輸血
- 臓器や組織移植
- 予防接種などでの注射針の使いまわし

Baby's Room. 赤ちゃんの部屋





HBVの感染を調べるには、まず**HBs抗原**の血液検査を行います。HBs抗原が陽性なら、HBVに感染していると考えられます。逆にHBs抗原が陰性なら、ほとんどの場合、HBVに感染していないと考えて差し支えありません。

一般に**HBe抗原陽性、HBe抗体陰性**の場合は、ウイルスの増殖力が強く、「肝炎」の程度が高く、他の人への感染する可能性が高い状態と考えられます。**HBe抗原**が陰性になり、**HBe抗体**が陽性になった状態が**セロコンバージョン**と呼ばれ、ウイルスの活動が人間の免疫機能によって抑え込まれた状態を意味し、一昔前はセロコンバージョン状態になればB型肝炎は治癒したものと思われていました。しかしながら、仮にHBe抗体陽性であっても、「肝炎」が徐々に進行して「肝硬変」になったり、あるいは肝炎が進行しなくても「肝臓がん」になることがあるので嚴重な注意が必要とされています。

(なぜセロコンバージョンが治癒とならないかと言うと、HBVの変異株が誕生することがあるからです。せっかく免疫力によってHBVを抑え込み、肝炎が治った状態になっても、ウイルスのDNAが突然変異し、これまでとは異なる変異株が生まれるのです。この変異株によってHBVは再び増殖を繰り返ははじめ、慢性肝炎や肝硬変を発症します。)

B型肝炎を急性肝炎を発症して治癒した人、あるいはB型肝炎ワクチンを接種した人は**HBs抗体**が陽性となります。HBs抗体が陽性の人、仮にHBVが体内に入っても、ウイルスは排除され、肝炎を発症することはありません。HBs抗体はいわゆる中和抗体として働きます。

HBVのウイルス量を具体的に数値化したものが**HBV-DNA**で、特にインターフェロン治療などの治療効果を見るときに有用です。通常、HBV-DNA値は対数表示され、ウイルス量が「6.0」と表示されればHBVが 10^6 個いることになります。ウイルス量が少なくなると「1.8未満」「検出せず」などと表示されますが、多くの場合HBVは肝臓内に存在し、決してウイルスが消失したわけではないので、この点を忘れてはいけません。

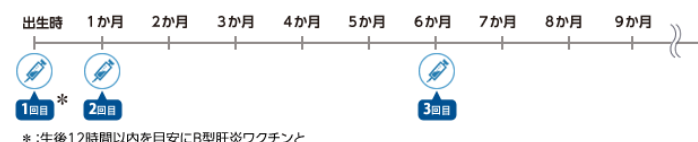
B型肝炎ワクチン予防接種について

B型肝炎ワクチンの接種スケジュール

B型肝炎ワクチンは、生後2か月ごろから始めてしっかり3回接種することが推奨されています。



母子感染予防の場合（健康保険適用）



これまで日本では、ウイルスは持っているが発症していないB型肝炎キャリアのいる家族や、B型肝炎キャリアを含むB型肝炎患者と接触する機会の多い医療従事者などがB型肝炎の予防接種の対象とされてきました。

そのため、キャリアが身近にいない方にとっては、あまりなじみのない予防接種だったのですが、最近になって、乳幼児期は唾液や体液を介して感染する機会が多く、保育園で乳幼児が集団感染するなどの報告があり、垂直感染とされる母子感染の予防だけでは不十分な可能性が出てきました。

今年10月からB型肝炎ワクチン予防接種は定期予防接種化されます。

対象は今年4月以降に生まれる0歳児。原則として生後2、3、7～8カ月の3回接種が標準となります。妊婦がB型肝炎ウイルスに感染していた場合は、子への感染防止のため生後12時間以内に1回目の接種をしており、定期接種の対象からは除外されます。

図は、「赤ちゃんの部屋」「西日本産業衛生会」「パピマミ」、「国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 肝炎情報センター」ホームページから引用しました。

この「診療所だより」や診療についての御意見・御要望などをお気軽にお寄せ下さい。
これからの参考にさせていただきます。

編集・発行： 勝山諒亮

〒639-2216

勝山診療所

奈良県御所市343番地の4（御国通り2丁目）

電話：0745-65-2631